

令和５年度病害虫発生予察特殊報 第２号

令和５年１０月１１日
岐 阜 県

１ 害虫名 トマトキバガ *Tuta absoluta* (Meyrick)

２ 確認地域 飛驒地域

３ 発生状況

令和５年９月１９日、中山間農業研究所内トマト栽培ほ場周辺に設置したトマトキバガ侵入調査用のフェロモントラップにおいて、トマトキバガ疑義成虫が誘殺された（写真１）。誘殺された成虫について、農林水産省名古屋植物防疫所に同定依頼した結果、トマトキバガと同定された。現在のところ、本県では本種による農作物の被害は確認されていない。

本種は、国内では令和３年１０月に熊本県、同年１２月に宮崎県のトマト栽培ほ場で確認された。それ以降、フェロモントラップ調査により、これまでに本県を含め合計２７道県で誘殺が確認されている。

４ 形態及び生態

（１）形態

成虫は、翅を閉じた静止時で体長５～７mm（前翅長約５mm、開張約１０mm）。前翅は灰褐色の地色に黒色斑が散在する。後翅は一様に淡黒褐色である（写真２）。幼虫は、終齢で約８mm、体色は淡緑色～淡赤白色。頭部は淡褐色。前胸の背面後方に細い黒色横帯がある（写真２）。

（２）生態

１年に複数の世代が発生し、繁殖力が高い。卵～成虫になるまでの期間は２４～３８日程度で、気温が低い時期はさらに延びる。成虫は夜行性で、日中は葉の間に隠れていることが多い。主な寄主植物はトマト、ナス、パレイショなどナス科植物で、インゲンマメも寄主植物として確認されている。雌は一生のうちに平均で約２６０個の卵を寄主植物の葉の裏面などに産み付ける。

５ 被害

トマトでは、茎葉の内部に幼虫が潜り込んで食害し、孔道が形成される。食害部分は表面のみを残して薄皮状になり、白～褐変した外観となる（写真３）。果実では、幼虫がせん孔侵入して内部組織を食害するため、果実表面に数mm程度のせん孔痕が生じるとともに食害部分の腐敗が生じ果実品質が著しく低下する（写真４）。

６ 防除対策

（１）ほ場内をよく見回り、見つけ次第捕殺する。

（２）発生を拡大させないため、薬剤散布を行うとともに、被害葉や被害果はほ場に放置せず、速やかに土中深く埋めるか、ビニル袋に入れて一定期間密封し成幼虫を死滅させるなど、適切に処分する。

(3) 現在、トマトキバガに対する登録薬剤はトマトおよびミニトマトにある。なお、農薬散布にあたっては、最新の農薬登録情報を確認し、薬剤抵抗性の発達を防ぐため系統が異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(農林水産省「農薬登録情報提供システム」<https://pesticide.maff.go.jp/>)



写真1 本県で設置した
フェロモントラップに誘殺された個体



写真2 トマトキバガ成虫（上段）
終齢幼虫（下段）



写真3 トマト葉の食痕
(飼育個体)



写真4 トマト果実の食痕
(飼育個体)

写真2～4は農林水産省植物防疫所原図・無断転写禁止